

たぎせ
滝瀬遺跡 (本発掘調査B)

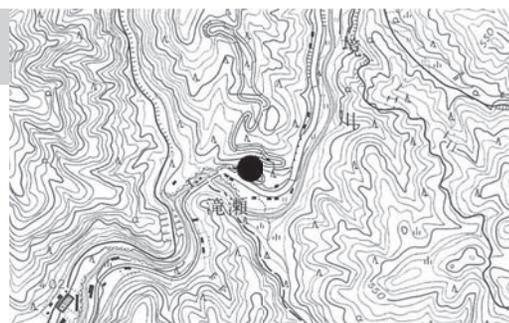
所在地 北設楽郡設楽町八橋字タキセ
(北緯35度6分33秒 東経137度33分58秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成30年7月～平成31年1月

調査面積 6,900㎡

担当者 鈴木正貴・早野浩二・川添和暁



調査地点 (1/2.5万「田口」)

調査の経過 発掘調査は設楽ダム建設事業に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所から愛知県教育委員会を通じた委託を受けて実施した。平成27・28年度に実施した県道10号以南の発掘調査においては、主として縄文時代早期・中期・

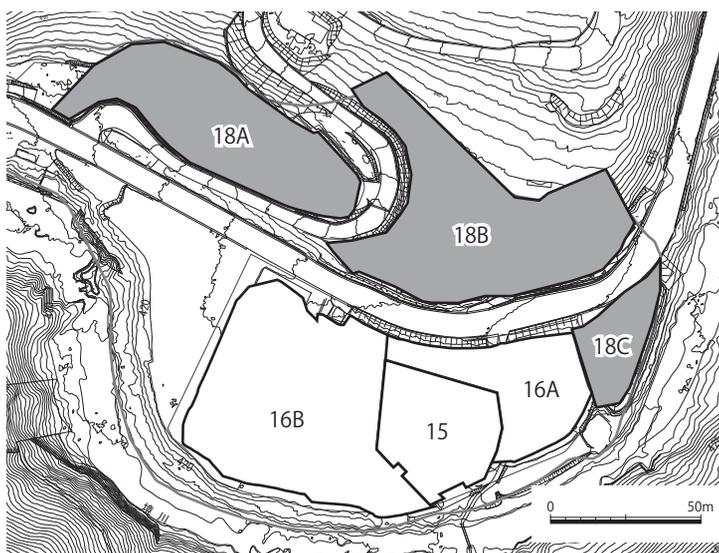


図1 調査区配置図 (1:2500)

後期の遺構と遺物が確認されている。平成30年度は、県道以北の丘陵斜面の上位に18A区(西半)と下位に18B区(東半)、16A区に隣接し、境川に面する段丘上に18C区を設定した。

立地と環境 滝瀬遺跡は境川右岸の河岸段丘上から山麓の丘陵斜面に立地し、遺跡には江戸時代の伊那街道が通る。対岸の長江川右岸には縄文時代と平安時代の遺物散布地である八橋大平遺跡、滝瀬遺跡を臨む丘陵上の緩斜面には縄文時代の遺物散布地である長久保遺跡、境川に合流するタコウズ川左岸沿いの丘陵緩斜面には縄文時代の遺物散布地である根道外遺跡が分布する。

調査の概要 県道以北の丘陵斜面下位の18A区においては、主として平安時代の竪穴建物跡を含む遺構群、県道以北の丘陵斜面上位の18B区においては、主として縄文時代早期前葉以前(草創期末から早期初頭)の竪穴状遺構群、県道以南の段丘上の18C区においては、主として縄文時代後期から晩期の遺構群と近世以降の遺構群を検出した。(早野浩二)

18A区 18A区は南西側にある谷地形に向かった傾斜地形となっている。谷の堆積層は、表土・耕作土の下は近世末以降の黒色粘土層が2m以上にも渡って厚く堆積しており、その下には褐色粘土質シルト層、さらには巨礫混りの黄褐色砂質シルト層(地山)へと続く。

本調査区で遺構が展開していたのは、調査区北東側の緩斜面区域のみである。層序は、上からI層(耕作土あるいは盛土)・II層(小礫を含む黒色シルト層)・III層(灰褐色粘土質シルト層)・IV層(灰黄褐色粘土質シルト層)・V層(黄褐色粘土層あるいは巨礫混りの砂質シ

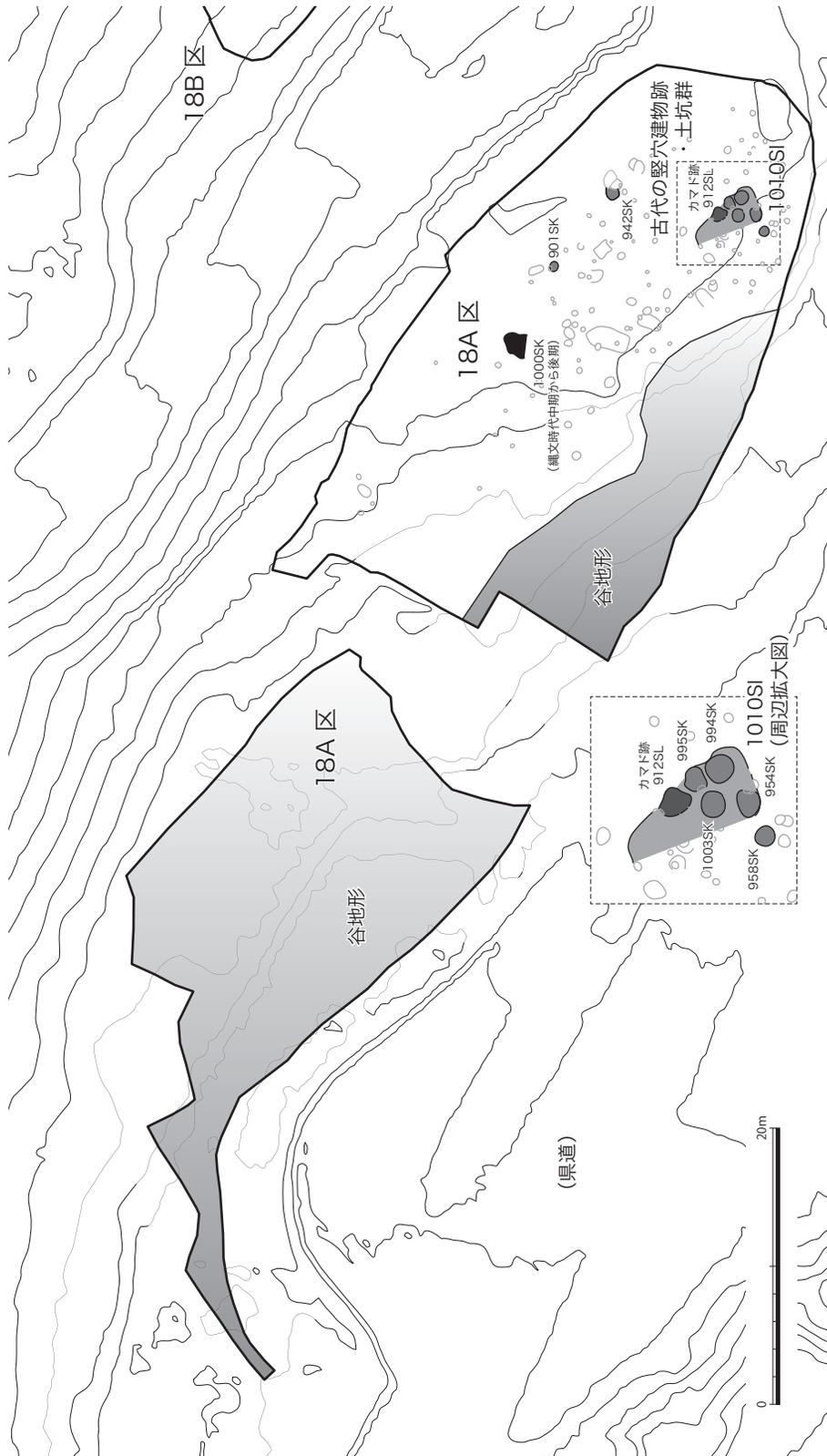


図2 18A区遺構配置図 (S=1/500)

ルト層)の堆積が確認できた。このうち、II層は近世の遺物を含む包含層、III層は古代の遺構・遺物を含む包含層、IV層が縄文時代の早期以前と考えられる遺物包含層、V層が地山である。ここでは、IV層上面で古代の遺構群の展開を確認することができた。

古代の遺構には、カマドを伴う竪穴建物跡・土坑・ピットがある。竪穴建物跡(1010SI)は、緩斜面上方の北東端のみが辛うじて残存していた。中央にはカマド跡(912SL)があった。構造の残存状況は良好で、袖にした盛土部分や壁面に添わせた板石の構造などが観察された。西側板石はカマド土坑掘り方に密接しており、かつ下は地山に埋めこまれた状態で見つかった。一方、東側板石はカマド土坑掘り方との間に焼土を含む層が挟まっており、かつ掘り方底面より若干上位で検出されたことから、機能中に作り替えが行なわれた可能性がある。カマド底面および側面には被熱痕跡が認められた。その面とは別に、底面直上には焼土が10cm程度水平堆積しており、さらにその上面には板石が配されていた。配された板石の上から、灰釉陶器や土師器甕片がまとまって出土した。

径1m程度の土坑群が、この周辺から集中して見つっている(954SK・955SK・958SK・994SK・954SK・1003SK・958SK)。1010SIとの前後の関係は不明であるが、955SK・994SKに関しては、1010SIより後で形成されたものである。これらの土坑からは炭化材由来の炭化物が多量に出土した。955SK・994SKでは断面形状が袋状を呈していた。これら土坑群から北に7mほど離れた、緩斜面上位で見つかった942SKも同様な遺構である。いずれも遺構からも、碗や段皿などの灰釉陶器片が出土した。また、901SKはこれらとは異なる小型の土坑であるが、灰釉小碗の出土を見た。

ピットは緩斜面に渡って広く検出されたものの、掘立柱建物跡あるいは列として確認できたものはなかった。埋土はIII層のみならずII層のものもあることから、一部近世のものも含まれてる可能性がある。

縄文時代の遺物が出土した遺構には、100SKがある。袋状土坑の可能性を考慮して調査を進めたものの、一方が浅くかつ一方が深い土坑の埋土状況や底面形状では、倒木痕を含めた別性格の落ち込みと考えられる。埋土内からは、縄文時代中期から後期の土器片や磨製石斧片が出土した。

IV層は、旧表土のような堆積層である。掘削したところ、緩斜面全体に渡って、礫器のほか、溶結凝灰岩や安山岩の剥片石核類が散在的に出土した。定型的な石器および土器の出土が認められなかったことから詳細な時期比定は難しいものの、縄文時代早期以前の所産である可能性が高い。

V層は、特に調査区北東側において、極めて均質な粘土層となっていた。調査時においても地下水の影響か、水分を多く含む堆積層であった。この均質な粘土は、調査後の深掘りによって、最大2m程度も堆積していることが確認された。(川添和暁)

1 8 B 区 18B区の主要な遺構として、丘陵上位の緩斜面において検出された縄文時代早期前葉以前(草創期末から縄文時代早期初頭)の竪穴状遺構(竪穴建物)、縄文時代早期の可能性が高い集石遺構、縄文時代後期初頭の土器敷き遺構等がある。その下位の丘陵斜面は巨礫を含む礫層が広範囲に露出し、遺構はほとんど検出されなかったが、南東端付近においては、16A区・18C区に連続すると思われる黒色土(遺物包含層)の堆積、集石遺構を確認した。

竪穴状遺構は11基を検出した。これらには相互に重複する竪穴状遺構(848SI・809SI)も含まれ、先後関係も判明している(848SIが先行し、809SIが後出する)。

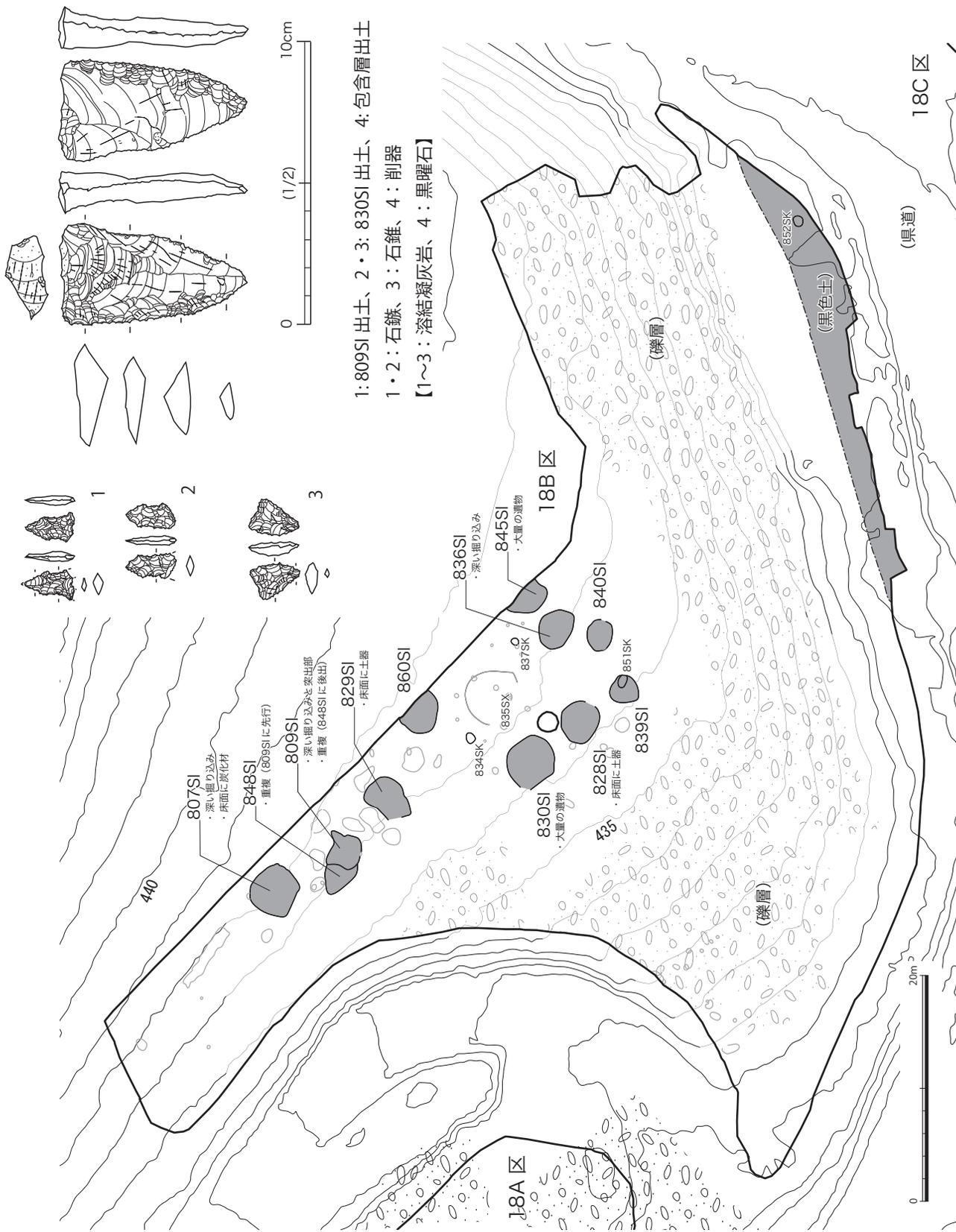


図3 18B区遺構配置図 (S=1/500)・出土遺物 (1/2)

規模は長軸 5 m から 6 m 程度の大型の部類に属する遺構 (807SI・830SI)、長軸 2 m から 3 m 程度の小型の部類に属する遺構 (839SI・840SI)、長軸 4 m 程度の中間的な遺構 (848SI・809SI・829SI・860SI・828SI・836SI・845SI) がある。平面形は隅丸方形に近い形状 (807SI・836SI)、円形に近い形状 (809SI・860SI)、隅丸方形と円形の中間的な形状 (830SI・828SI)、やや不整な方形 (829SI・845SI)、不整な円形 (848SI・839SI・840SI) がある。(竪穴状の) 掘り込みは、丘陵側を竪穴状に著しく深く掘削する遺構 (807SI・809SI・836SI・860SI?)、全体として掘り込みがやや深く、断面鉢状に掘削する遺構 (830SI・845SI?)、掘り込みがやや浅く、緩やかな遺構 (848SI・829SI・828SI・839SI・840SI) がある。

竪穴状遺構に付属する柱穴はやや明確さを欠くが、床面中央付近に 1 基または 2 基程度の柱穴様の小土坑が確認される遺構 (807SI・848SI?・860SI・828SI?・845SI)、それらを含めて柱穴が確認されない遺構 (829SI・830SI・839SI・840SI・836SI) がある。炉は確認されていないが、809SIにおいては、北東方向に突出する部分がわずかに被熱赤変し、周囲に炭化物も散在していた。

検出した竪穴状遺構の大半 (848SI・809SI・829SI・830SI・828SI・836SI・845SI) からは、表裏縄文系土器、撚糸文系土器を主とする縄文時代早期前葉以前(草創期末から縄文時代早期初頭)の土器が出土している。なお、竪穴状遺構とその付近から明確な押型文系土器は出土していない。土器を含む遺物は覆土中からの出土が多いが、床面から良好な状態で土器が検出された遺構 (829SI・828SI) もある。また、覆土中から石皿・台石類、磨石・敲石類、石鏃、石錐、剥片等の石器、礫が大量に出土した遺構 (830SI・845SI)、竪穴建物(竪穴状遺構)の床面付近に炭化材が良好に遺存していた遺構 (807SI) もある。後者について、放射性炭素年代測定をした結果 (PLD-37115)、¹⁴C 年代を暦年代に校正した年代範囲で、9152-8807 cal BC (95.4%)を示した。なお、剥片石器の使用石材は溶結凝灰岩、安山岩が主体である。その他、同時期の特徴的な遺物として、包含層中から出土した黒曜石製の削器がある。

集石遺構は 3 基を検出した。851SK は長軸 1.2 m 程度で、839SI と重複し、それに後出する。遺構には石皿・台石類、扁平な大型の石材が集積され、石材には被熱赤変したような部分も認められた。834SK は長軸 0.9 m 程度で、拳程度の大きさの礫が集積され、被熱赤変した礫も多く含まれていた。集石遺構から土器は出土していないが、検出状況等から縄文時代早期に帰属する可能性が高いと考えられる。

縄文時代後期初頭の土器敷き遺構 (837SK) は、破片化した深鉢約 1 個体分が検出された遺構で、土器は基盤層上に直接、敷かれた状態であった。(早野浩二)

18C 区 18C 区は、16A 区に隣接する、境川沿いの低位部分に位置する。調査区中央部分は後世の平坦面造成のために削平が著しかったものの、県道側と境川脇では、包含層の残存が良好であった。

層序は、調査区北の県道側では、上から I 層(表土および盛土)・IIa 層(礫混じり黒色粘土質シルト層)・III 層(黒色粘土層)・IV 層(灰黄褐色粘土質シルト層)・V 層(黄褐色粘土質シルト層)である。この層序は 16A 区と同様で、IIa 層は近世以降の堆積層、III 層が縄文時代後期前葉の包含層、IV 層が縄文時代早期の包含層、V 層が地山である。IIa 層からは旧伊那街道と思われる道路状遺構が見つかった。III 層では後期前葉を中心とする遺物が出土し、IV 層上面で、石皿の埋納された土坑 (785SK) が見つかった。また、付近からは、内面に赤色顔料の残存する土器底部が見つかった。

今回の 18C 区では、境川に向かう調査区東端でも包含層の保存が良好であった。I 層下か

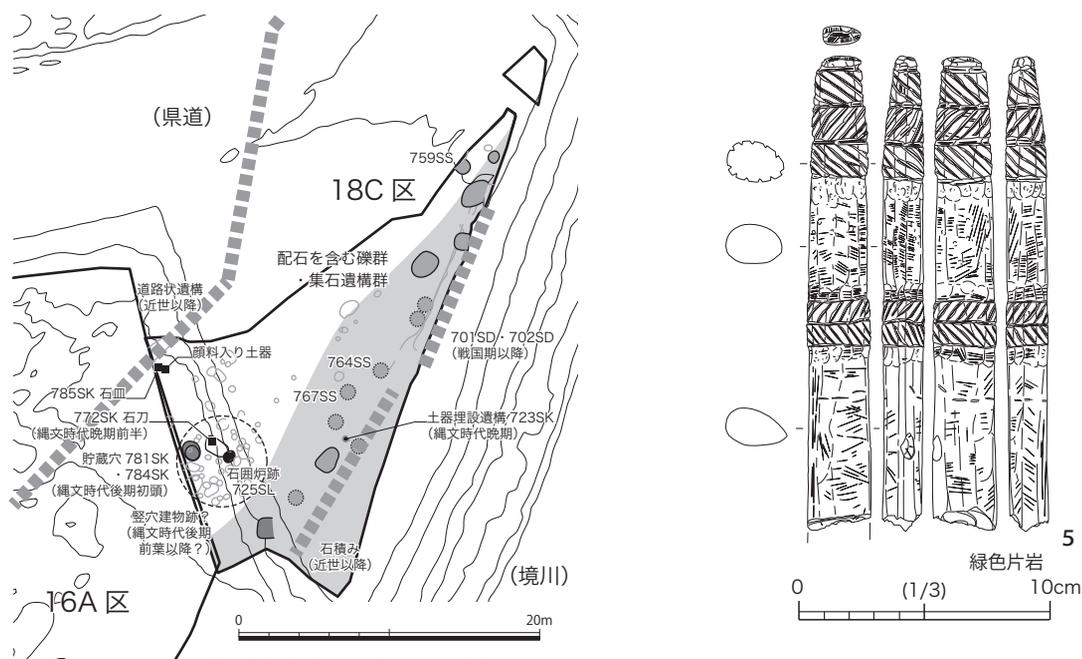


図4 18C区遺構配置図(S=1/500)・出土遺物(1/3)

らは、IIb層(黒褐色砂層)およびIII層に相当する灰褐色砂質シルト層が見つかった。IIb層は、細片化した灰釉陶器および山茶碗が含まれる層で、戦国期以降の層と想定される。調査区北東端で見つかった701SD・702SDは、このIIb層内で構築されている溝であり、特に701SDは両側に板状礫が配されていた。その下で確認された灰褐色砂質シルト層からは、土器片・石器がまとまって出土した。この層は形成途中で円礫が集石状に多く含まれており、一部には配石が確認された(764SS・767SS)。また、この層を掘り込んで縄文時代晩期に属する立位の土器埋設遺構(723SK)も見つかった。灰褐色砂質シルト層を掘削した下のV層直上では、落ち込み内で集石が複数個所で見つかった。明確に被熱痕が認められるものは限定的で、被熱痕の明瞭な759SSは集石跡であったと考えられる。

16A区に接する調査区西端中央では、IV層直上で、土坑・ピットがまとまって見つかった。725SLは石囲炉跡である。この炉跡は四方を板石で囲むものであるが、板石が二重になっている部分があった。精査した結果、この炉跡は二時期のものが重複していたことが明らかになった。また、この周囲を見ると725SLを中心にした径5m程度の範囲内にピットが検出されたことから、この範囲に竪穴建物跡があったことが想定できる。時期の詳細は不詳であるが、状況から縄文時代後期前葉以降に属すると考えられる。

725SL脇には、長軸1m程度の土坑(772SK)が検出された。埋土中位のレベルで炭化物粒を多く検出した土坑で、埋土には遺物はほとんど含まれないものの、底面では石刀・台石などが出土した。石刀は榎原文様が刻まれており、晩期前半に属する(5)。この遺構は土壙墓のようにもみえるが、底面は片側のみが深い形状となっており、性格は不明である。

また、772SKの脇には、径1mを越える大型の土坑が検出されている。掘削・埋納を繰り返された土坑で、本来は貯蔵穴であったと考えられる。上部を781SK・下部を784SKとし調査したところ、781SKの底面で、板石が複数枚敷かれた状態で見つかった。両遺構とも多量の土器片が出土したが、板石下の784SKでは、多量の深鉢片が敷かれたように配されていた。781SK・784SKの出土遺物は、ともに縄文時代後期初頭が主体である。(川添和暁)



滝瀬遺跡全景



18A区全景 (東半)



18A区全景 (西半)



18A区古代のカマド跡912SL土層断面



18A区古代の土坑942SK出土灰釉陶器



18B区全景



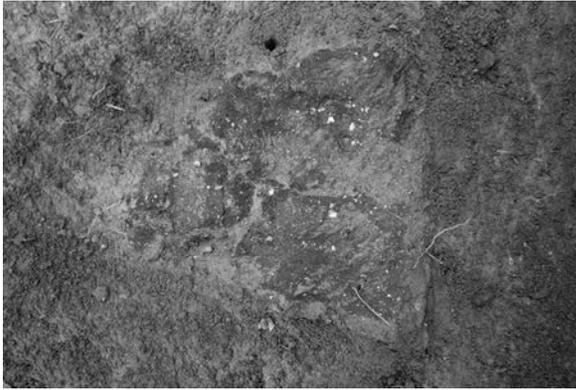
18C区全景



18B区重複する竪穴状遺構848SI・809SI



18B区竪穴状遺構830SI遺物検出状況



18B区竪穴状遺構829SI床面出土縄文土器



18B区竪穴状遺構845SI



18B区竪穴状遺構860SI



18B区集石遺構851SK



18B区集石遺構834SK



18B区土器敷き遺構837SK



18C区遺物包含層内集石・礫群出土状況



18C区集石遺構759SS



18C区配石遺構764SS



18C区貯蔵穴784SK内石組み下土器出土状況



18C区石囲炉跡725SL



18C区石囲炉跡725SL周辺ピットなど



18C区石皿出土状況



18C区土坑772SK内石刀